HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イタリア語と日本語の複文における時制について
Author(s)	Marianna, Cespa
Citation	研究論集, 12, 169(左)-187(左)
Issue Date	2012-12-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51966
Type	departmental bulletin paper
File Information	009_MARIANNA.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

イタリア語と日本語の複文における時制について

チェスパ・マリアンナ

要　旨

本稿は現代日本語とイタリア語の時制の相違点や共通点に関して論じるものである。言うまでもなく，言語が異なると文法も異なるため，用語法が厳密な部分とそうではない部分があるように見えるが，どの言語もあらゆる言語に翻訳することが可能であり，それらの言語間の異なる時制形式を説明することも可能であるということが本稿の前提である。本稿ではかなり相違があると思われているイタリア語と日本語の時制形式とその関係について述べながら，２つの言語をどのような視点からどう一般化して捉え，どのような諸手段で表現しているか，またこのような言語的時間の本質がどのように有機的に発話行為に繋がっているかに関しても考えていく。

本稿で取りあげるのはイタリア語と日本語の現在時制と過去時制の本質とその用法であり，特に複文における用法である。日本語に時制はないという立場と日本語の時制は曖昧であるという立場をとる学者がいるが，本稿では日本語にも時制があると考える。従来の様々な外国語教育研究の結果によると日本語を母国語とする学生にとってはイタリア語の時制が複雑であるのに対し，イタリア語を母国語とする学生にとっては日本語の時制が曖昧のようである。おそらく，イタリア語には日本語にない時制の一致のルールがあるからだと考えられる。このルールによるとイタリア語は主節の動詞が過去形のとき，従属節の動詞はその影響を受ける。一方，日本語ではこのような時制の一致の制限はないが，動詞が動作動詞か状態動詞かによって，その文の時制（またはアスペクト）を決める上での力関係が違ってくる。

次に，イタリア語の過去時制に属する近過去と遠過去の相関関係について述べる。その際には，例文を挙げながら，それらの時制の「代用」の一般的な傾向が適切かどうかに関しても考えていく。

1．イタリア語の時制

事態の成立時点を認識するための絶対的な基準時点は存在しないが，常識的には，時間は過去から未来へと過ぎ去っていく直線として捉えられる。過去から現在を経由して未来に向かって流れる一本の時制軸を想定すれば，過去時制は眼前にある現在という時点からみて過去に事象を位置づける。そこで，文が発話される時点である「発話時点」を基準として，発話時点との関係で事態の成立時点を捉える方法が選択される。発話時点と同時であれば「現在」であり，発話時点より前であれば「過去」，以後であれば「未来」である。ただし，時間的な関係を指示するのは時制だけではなく，時間副詞も関連しており，その相関関係が言語によって異なるため，複雑である。

1.1　イタリア語の直説法

本稿で取りあげるのはイタリア語の「直説法[1]」のみであり，時制形式として取りあげるのは「現在」と「過去（半過去，近過去，遠過去[2]）のみにすることとし，これらの時間的な関係についても述べることとする。例文を挙げてみると，現在時制と過去時制の適用が明らかに異なることがわかる。その上で，日本語の過去形をイタリア語にするとどの過去時制で表現すればよいかについて考えていきたい。まず，これらの時制の定義[3] を挙げる。

「現在形」

Il presente indica simultaneità rispetto al momento dell’enunciazione, in genere con verbi durativi: il presente esprime un evento che dura per un lasso di tempo più o meno che include il momento dell’enunciazione.

訳：現在時制は動作が発話時点と同時に行なわれているということを表す。多くは，継続動詞とともに用いられる。

「半過去」

L’imperfetto presenta un evento anteriore al momento dell’enunciazione sotto l’aspetto imperfettivo. Diversamente dal perfetto semplice e dal perfetto composto, che considerano l’evento dal punto di vista del presente e come concluso, l’imperfetto presenta l’evento dal punto di vista del passato e come un evento in corso in un dato momento di riferimento nel passato’.

1　接続法，条件法，命令法も存在している。

2　「大過去」と「先立過去」も存在しているが，本稿では省略する。

3　Salvi, Vanelli (2004)

訳：半過去は動作が発話時点より前に行なわれているということを表すが，他の過去時制である近過去と遠過去と違い，その動作または状態が終わらないままの姿で表現する。これを「未完了性」と呼ぶ。また，半過去はその動作・状態を現在の視点からではなく，過去の視点から描写する。

「近過去」

Il perfetto composto indica un evento anteriore al momento dell'enunciazione sotto l'aspetto compiuto. L'importante non è tanto la distanza temporale dell'evento rispetto al momento dell'enunciazione, quanto che gli effetti dell'evento persistano ancora, o siano in qualche modo rilevanti per il parlante al momento dell'enunciazione.

訳：近過去は発話時点より前に行なわれた事象のことを表す。重要なのは発話時とその事象の間の時間的な距離ではなく，話し手にとっては心理的にその事象の効果が発話時まで持続しているということである。

「遠過去」

Il perfetto semplice indica un evento anteriore al momento dell'enunciazione sotto l'aspetto perfettivo aoristico, senza alcun legame con il momento dell'enunciazione.

訳：遠過去は発話時点より前に行なわれた事象のことを表す。近過去との主な違いは現在との関係であり，遠過去で描写された事象は発話時と無関係である。

1.2 イタリア語の時制の一致

「時制の一致」とは，主節，従属節双方の，動詞の時間的相関関係を捉えた名称であり，イタリア語においては強制的と思われているが，そうではないと本稿で提案する。一般にどのような時制の組み合わせ[4]が可能であるかを見てみる。最初に，主節の時制が現在形の場合について述べるが，この際には従属節の時制と発話時点が一致しているということとなる。

「主節の時制が現在形の場合」

(1)	So che sei stanco	（現在形＋現在形）	➡ 同時性
(2)	Mi domando che cosa è successo a Marco	（現在形＋近過去）	➡ 以前関係
(3)	Ti prometto che domani alle 5 partirò	（現在形＋未来形）	➡ 以後関係

以上の例文からわかるように，主節が現在形で描写された事態との同時性を表すのは現在形，以前関係を表すのは過去時制，以後関係を表すのは未来時制である。

[4] 主節の時制が未来形の場合に関しては本稿では省略する。

「主節の時制が過去形の場合」

主節の時制が過去形の場合，様々な問題が生じてくるため，主節の時制が現在形の場合よりも複雑である。この場合，従属節の時制は主節の時制により決定され，この現象は「牽引ルール」と呼ばれる。以下ではまず同時性関係がどのように表現されるかを説明し，次に以前関係，最後に以後関係の順番で述べていく。通常，主節が過去時制の場合，**同時性**を表す時制は半過去である（動詞により直説法や接続法も可能）。

「動作動詞」

(4)　Luigi mi disse/ha detto che usciva　（遠過去／近過去＋半過去）

訳：ルイジは出かけると言った

「状態動詞」

(5)　Luigi mi disse/ha detto che era malato　（遠過去／近過去＋半過去）

訳：ルイジは病気だと言った

以上の場合は補足節であるため，半過去の適用は強制的である。それとは異なり，関係節の場合は発話時が支配的であるため，半過去以外の時制の適用も可能となり，主節との同時性が文脈上でわかることも多い。まず，補足節の場合，半過去を適用しなくてはならないというルールが存在していると述べたが，実際に半過去でない時制，つまり現在形の適用も可能であるということが本稿で提案する。

(4a)　Luigi mi ha detto/disse che usciva/esce　（近過去／遠過去＋半過去／現在形）　➡　同時性

(4b)　Luigi mi ha detto/disse che era/è malato（近過去／遠過去＋半過去／現在形）　➡　同時性

このように，従属節の時制を表す動作・状態が発話時まで持続していることも可能であるということがわかる。従って，従属節においては半過去だけではなく，現在形の適用も可能であると言える。ただし，動詞によって表現される動作・状態が発話時まで持続するならば，補足節以外の節には「牽引の半過去」は適用できない。

(4')　I ladri sono entrati nella casa di una ragazza che abitava vicino a me（近過去＋半過去）

➡　＊同時性

訳：空き巣は私の近くに住んでいた子の部屋に入った

一般的には，半過去は主節と従属節の同時性を表すが，この例文に関しては解釈が異なって

くる。なぜなら発話時とその出来事が同時ではなく，以前関係となってくるからである。そのために，関係節の場合，発話と同時であれば現在形を適用すればよいと考えるのが正しい。続いて，**以前関係**の際の時制の組み合わせを見ていく。

(6) Giorgio mi ha detto che ha visto Carlo prima della sua partenza （近過去＋近過去）
訳：ジョルジョはカルロが出発する前に会ったと私に言った

(7) Ha rivisto il ladro che l'aveva scippata （近過去＋大過去）
訳：彼女は引ったくりをされた泥棒ともう一度会った

(8) Ho conosciuto ieri un professore che l'anno scorso insegnava nella vostra scuola （近過去＋半過去）
訳：去年あなた達の学校で教えていた先生と昨日知り合いになった

それぞれの例文からわかるように，主節の過去時制との以前関係を表すためには従属節には近過去，大過去，半過去（反復と習慣的な動作の場合のみ）が用いられる。さらに，詳しく述べると，過去時制の中で主節の過去時制に対する以前関係を表す時制は大過去のみである。それに対して，近過去と半過去は本質的に発話時点との以前関係しか表さないが，文脈により主節との以前関係を表すことも可能である。ただし，従属節の時制が半過去だと，解釈に曖昧さが生じてくるので非常に複雑だと言える。具体的には 2 つの解釈が考えられる。それらは「主節の時制より前」「主節の時制と同時」のいずれかである。このような場合には文脈の影響が大きく，それにより判断が可能である。そして，従属節には一般的に遠過去を用いることができないという点に注意すべきである。なぜなら，遠過去は厳密に直示的な時制であるため，発話時点との以前関係の解釈を認めないからである。

(9) *Non mi ricordavo quando lo incontrai （半過去＋遠過去）
訳：いつ会ったかを覚えていなかった

ただし，主節に近過去が用いられた場合従属節に遠過去を置くことができる。なぜなら，近過去により描写された出来事の影響が発話時まで持続するからである。まとめると，過去時制の用法が節の種類に合わせて決まると言える。例文からわかるように，関係節の場合，過去時制は発話時点より前の事柄を表すこともでき，描写された出来事を主節よりも先に位置づけることも可能である。これは関係節の時制が主節の時制と結びつけられなくてもよいため，発話時点との以後関係を表すこともできるからである。続いて，**以後関係**について見てみよう。

(10a)　Carlo mi ha detto che verrà/viene a prendermi domani　　(近過去＋未来形／現在形)
訳：カルロは明日迎えに来ると言った
(10b)　Carlo ha detto che sarebbe venuto/veniva a prendermi domani
(近過去＋条件法過去／半過去)
訳：ジャンニは明日迎えに来ると言った

この 2 つの例文では，過去時制で表現されている出来事以後の出来事がそれぞれ発話時の前（10a）と後（10b）に位置づけられている。(10a) の場合，2 つの出来事が異なる時間枠（発話時点の前と発話時の後）に属しているため，時制の一致が実施されず，直示的な未来形か現在形が適用される。(10b) は主節の時制との以後関係を表す例文であり，この場合は発話時との位置は無関係である。これは時制の一致のルールに従うため，従属節には条件法過去か半過去が必要とされる。半過去が「simultaneità nel passato」（過去における同時性）を表す時制であるため，主節の過去時制以後のことを表すこともできる。この点に関しては後ほど詳しい説明するのでここでは省略する。

2．主節における近過去

以上に述べたが，主節の時制が過去時制だと，従属節の時制も影響を受け過去形となる。しかし，そうでない場合，つまり過去時制でなくても適用ができる場合も可能であると考えられる。次の例文を考察しよう。

(11)　Ho saputo che Luigi parte oggi　　(近過去＋現在形)
訳：ルイジは今日出発すると知った

この例文は同じ時間枠に属していない（主節＝過去時制／従属節＝現在）時制から成り立っているため，直示的な時制として解釈すべきであり，時制の一致のルールに従っていないように見える。しかし，近過去の特性とその機能をより詳しく分析すれば，時制の一致のルールに従っていると言える。

本稿では近過去の機能を 2 つに分け，「現在と切り離されている近過去」と「現在と切り離されていない近過去」という視点で説明することとする。それぞれの機能に適切な時制の一致のルールが適用されるため，2 つの時制の一致のルールが提案できると考えられる。次の例文で説明してみよう。

主節の近過去

a.「現在と切り離されていない過去」 ＞ oggi（今日）

b.「現在と切り離されている過去」 ＞ quel giorno（その日）

（11a） Ho saputo che Luigi parte oggi （近過去＋現在形）

訳：ルイジは今日出発すると知った

（11b） *Ho saputo che Luigi parte quel giorno （＊近過去＋現在形）

訳：ルイジはその日に出発すると知った

例（11a）では，近過去は現在形と同じような働きをしており，主節の時制が過去時制であっても従属節の時制は過去にならなくてもよい。つまり，近過去の代わりに現在形を適用すると通常の時制の一致のルールに従うことになる。

（11a’） So che Luigi parte oggi （現在形＋現在形）

それに反して，例（11b）では，現在と切り離されている事象を述べているため，現在形を適用すると非文となり，この場合は過去における同時性を表す半過去（partiva[5]）を適用しなくてはならないこととなる。この場合も，例（11b）と同じく副詞の影響が大きい[6]。まとめとして，以下の例文において近過去の本質に合わせた主節と従属節の時制の組み合わせがどうなるかを見てみよう。

（A） 主節の時制＝現在形または現在から切り離されていない過去（近過去）

So/ho saputo che Luigi	partirà/parte/partirebbe	domani	（以後関係）
So/ho saputo che Luigi	parte	oggi	（同時関係）
So/ho saputo che Luigi	è partito/doveva partire/sarebbe partito	ieri	（以前関係）

（B） 主節の時制＝現在と切り離されている過去（近過去／遠過去）

Ho saputo/seppi che Luigi	sarebbe partito/partiva	il giorno dopo	（以後関係）
Ho saputo/seppi che Luigi	partiva	quel giorno	（同時関係）
Ho saputo/seppi che Luigi	era partito/partì	il giorno prima	（以前関係）

[5] 半過去「partiva」は同時性ではなく，以後関係を表すことができる。

[6] 更に，副詞は時制の一致のルールを無効にする場合もあると言える。

以上の例文からわかるように，主節の過去時制が現在と切り離されているか否かによってルールが異なってくるということが言える。前者の場合，主節の事象を表す動詞と従属節の事象を表す動詞がそれぞれ独立しているように，つまり直示的な時制として考えるべきである。それに反して，後者の場合，主節の事象を表す動詞と従属節の事象を表す動詞がそれぞれ独立しているのではなく，相関関係で繋がっているように，つまり照応的な時制として考えるべきである。最後に，定義の部分で述べているように，近過去は完了アスペクトの視点からある事象を表す時制である。従って，近過去で表現される事象はすでに完了しているため，現在とは無関係に思われるが,実際にはそうではない。それに対して遠過去のように現在とは全く繋がっていない時制もある[7]。近過去は過去における事象を表しているが，その事象は必ずしも発話時以前であるとは限らない。要するに，その事象は発話時まで持続している可能性もあり，それ以後にも持続する可能性があるのだ。このような近過去の多様さは半過去と現在形との共通点の１つでもあり，近過去は「現在の過去」と呼ばれてもよいものである。現時点で焦点となるのは発話時点との距離ではなく，話し手の視点である。つまり，話し手にとってその事象の結果の状態が，発話時には重要であるかどうかという点であり，そこから「過程の現在の重要性」(rilevanza attuale del processo) という心理的な概念が現れてくる。複合時制の特徴の１つは (完了) アスペクト的な視点が時間軸の位置における位置づけという視点よりも優先的であり，時間軸から引き出される情報より重要ではないということである。結果として，近過去は時間的な特性を失い，その事象の結果を強調することになる。

3．従属節における時制と DAR（Double Access Reading）

主節の時制も従属節の時制も現在，過去，未来時制の可能性を呈し，様々な組み合わせができるが，ここで扱われるのは過去時制に埋め込まれた近過去と現在形と半過去の組み合わせのみである。一般的に，主節における時間的な解釈は話し手の視点に基づいてなされる。

⑿　Mario è partito ieri　（近過去）
訳：マリオは昨日出発した

例⑿は言うまでもなく過去時制であるため，過去の事象として理解され，さらに副詞「ieri (昨日)」があることからも「発話の前日」の事象として理解される。それに反して，従属節 (特に補足節) の場合には時間的な基準点は主節の時制である。それについては次の例が挙げられる。

7　イタリア南部では近過去の代わりに遠過去を使う傾向がある。

⑬ Gianni ha detto che Mario è partito (ieri)　（近過去＋近過去）
訳：ジャンニはマリオが（昨日）出発したと言った

この例の解釈に関しては問題なく，「出発した」と「言った」はそのまま時間的な順番として理解される。さらに，話し手に関する時間的な情報，つまり副詞を追加することも可能である。ちなみに，近過去の場合，副詞の使用は義務的なものではないため，「ieri」がなくても違和感はない。ただし，完全に副詞を自由に適用できるというわけではないため，注意すべき点もある。

（14a） Questa mattina Gianni ha detto che Mario è partito ieri
訳：今朝ジャンニはマリオが昨日出発したと言った
（14b） *Ieri Gianni ha detto che Mario è partito questa mattina[8]
訳：昨日ジャンニはマリオが今朝出発したと言った

例（14b）は，「出発した」と「言った」の時間的な順番が理解ができないため非文となる。しかし，時制の一致のルールに従い，「è partito」の代わりに条件法過去「sarebbe partito」または半過去「partiva」を適用すれば正しい文として認められる。従属節の場合，話し手の発話時点を基準にすることもできるが，その際は時制の一致のルール違反にならないように注意しなくてはならない。これまで考察してきた例文では従属節の時制は過去時制であり，その中でも近過去を適用した例文のみであったが，これ以降は現在形と半過去に関する問題点について論じていく。次の例文を見てみよう。

⑮ Gianni ha detto che Maria è malata　（近過去＋現在形）
訳：ジャンニはマリアが病気だと言った

日本語とは異なり，イタリア語や英語のような言語において，上記の例文の時間的な解釈は従属節で描写された出来事・状態は話し手の発話においてもジャンニの発話においても事実でなければならないということになる。つまり，マリアはその文が発話されるときにもジャンニの発話のときにも病気であるということである。この現象は DAR（Double Access Reading）と呼ばれ，すべての言語に存在している現象ではない。Giorgi（2002）によると：

‘il tempo verbale della frase subordinata per essere correttamente interpretato deve avere accesso ai punti, o intervalli, temporali definiti sia dal momento dell’enunciazione, sia dal tempo

[8] 時制の一致のルールに従わない例文のため，ここでは非文として扱われている。

verbale presente nella frase matrice’.
訳：従属節の時制が正しく理解されるためには，発話時と主節における時制によって決定された時間的な点もしくは区間に言及する

Giorgi が述べていることは，次の例でよりわかりやすくなる。

⑯　*Due anni fa Gianni ha detto che Maria è malata　（近過去＋現在形）
訳：二年前にジャンニはマリアが病気だと言った

この例においては，現在形の適用が不可能である。なぜなら，「due anni fa（２年前に）」という副詞があり，その事象は現在とは全く無関係であると解釈されるためである。この近過去の解釈に関しては，持続性がないと言えるが，それは副詞が伝える意味の影響のほうが強いためである。つまり，「２年前に」という副詞は過去時制を必要とし，現在形の「病気である」と対立していると言える。

それに対して，日本語訳を見てみると現在形の適用が全く矛盾として捉えられていないことがわかる。なぜなら，日本語のような言語では過去時制によって支配された現在形は DAR の現象を伴わないからである。イタリア語とは異なり，日本語ではマリアの病気の事実は発話時とは無関係であり，ジャンニの発話のみと同時であるという解釈になってくる。つまり，日本語ではマリアの病気はジャンニの発話時とは同時であるが，会話時点とは同時でないということになる。こういった日本語の解釈はイタリア語にも可能であり，そのときには半過去を適用しなくてはならない。

⑰　Gianni ha detto che Maria era malata　（近過去＋半過去）

DAR の現象の有無により，それを認めるイタリア語や英語のような言語と認めない日本語やロシア語のような言語を２種類にわけることができると言える。後者の場合，時間的な基準点となるのは主節の主語によって決定された時間的な視点のみであるのに対し，前者の場合は，時間的な基準点は二重である（主節の事象に関しても発話時に関しても解釈しなければならない）。しかし，イタリア語では半過去はその条件に従わない。半過去の特徴は，近過去と違い，何らかの時間的な指示を必要とすることであり，その指示は文脈によって明示さる。

⑱　*Gianni mangiava un panino　（半過去）
訳：ジャンニはサンドイッチを食べていた
（18a）　Ieri alle 5 Gianni mangiava un panino　（半過去）

訳：昨日5時にジャンニはサンドイッチを食べていた

上記の例文からわかるように，半過去の場合は文脈によって明示された時間的な指示が必要であり，それがないと不完全なものに感じられる。つまり，「mangiava」（食べるという事象）は「alle 5」（5時に）という副詞との同時性を表しており，「alle 5」は時間的な指示になる。また，副詞だけではなく，主節の動詞も指示の役割を果たすことができる。

⑲ Ieri Gianni ha detto che Mario mangiava un panino （近過去＋半過去）
訳：昨日ジャンニはマリオがパニーノを食べていると言った

例⑲の場合，半過去（mangiava）は主節の事象と同時に行なわれているように解釈される。しかし，時間副詞があると，半過去と主節の事象の相関関係が変わり，その同時性はなくなる。ここでは，従属節の事象は時間副詞によって明示された時間において位置づけられ，その副詞は主節の事象に関連づけて位置づけられるということになる。

⑳ Gianni ha detto che alle 5 Mario partiva （近過去＋半過去）
訳：ジャンニはマリオが5時に立つと言った

⑳では，出発は5時であり，それは「言う」という事象の以前に位置づけられている。要するに，半過去はある時間的な投錨を必要とし，その役割を果たすのは場合により副詞や動詞である。そして，例文で見たように，半過去で表現されている事象は話し手の視点によるのではなく，主節の事象の視点とのみ関係があり，同時性の関係が生じる。

続いて関係節についても述べていく。既に述べたように，関係節と補足節の時間的な解釈はかなり異なっており，関係節における主節と従属節の動詞は独立していると言ってよい。次の例文について考えてみよう：

㉑ Gianni ha invitato la donna che ha comprato il vestito rosso （近過去＋近過去）
訳：ジャンニは赤い服を買った女の人を誘った

上の例を以下の例と比較してみよう。

㉒ Gianni ha detto che Maria ha dormito （近過去＋近過去）
訳：ジャンニはマリアが寝たと言った

事象の起こる順番は「寝る」「言う」「今」であり，「言う」「寝る」「今」という順番は不可能ということになる。なぜなら，今まで述べてきたルールに従い，「寝る」が過去時制であるため，「言う」より前に位置づけなければならないからである。それに対して，例(21)はそのような条件を必要としない。この例の場合には，「買う」「誘う」「今」の順番と「誘う」「買う」「今」の 2 つの時間的な解釈が可能である。つまり，「買う」事象は「今」より過去に行なわれた事象であるが，主節と従属節の時間的な関係ははっきり決まっていないと言える。関係節における主節時制と従属節時制は互いに無関係であり，独立している節として考えるべきである。しかし，これは絶対的なものではなく，例外もある。次の例を見てみよう。

(23)　Gianni ha invitato una donna che comprerà un vestito rosso　（近過去＋未来形）
訳：ジャンニは赤い服を買う女の人を誘った

上の例文を以下の例文と比較してみよう。

(24)　Gianni ha invitato una donna che avrebbe comprato un vestito rosso　（近過去＋条件過去）

前者の場合，埋め込まれた事象は強制的に発話時以後として解釈できる。それに対して，後者に埋め込まれた事象は発話時とは関係なく，主節の事象以後として解釈することもできるのである。

次に，埋め込まれた現在形の場合はどのような解釈が可能かを見ていく。次の例文についても考えてみよう。

(25)　Gianni ha invitato la donna che mangia un gelato　（近過去＋現在形）
訳：ジャンニはアイスを食べている女の人を誘った

上記の例文における現在形は発話時と同時に行なわれているように解釈される。つまり，話し手の視点，また時間的な情報に関連づけて位置づけられているが，ジャンニの時間的な位置とは無関係である。このような意味を表現するには半過去が必要となる。

(26)　Gianni ha invitato la donna che mangiava un gelato　（近過去＋半過去）
訳：ジャンニはアイスを食べている女の人を誘った

(26)では，「食べる」事象はジャンニの時間的な位置と同時であるという解釈になる。さらに，補足節と同じように関係節にも副詞を追加してみよう。

(27) Gianni ha invitato la donna che mangiava un gelato un momento fa （近過去＋半過去）
訳：ジャンニはさっきアイスを食べていた女の人を誘った

この場合，半過去で描写された事象はジャンニの視点ではなく，話し手の視点で位置づけられている。ここで「un momento fa」は直示的に解釈され，話し手の時間的な視点に支配されているため，「食べる」事象もそれに合わせて位置づけられる。何度も述べたように，半過去は必ず時間的な投錨を必要とし，その投錨を通じて話し手の時間的な視点との繋がりをつくるということも言える。

まとめると，関係節（近過去，現在形，未来形の場合）は従属節の事象を強制的に話し手の時間的な視点に関して位置づけ，半過去の場合には適切な時間的な投錨があるときにのみ話し手に関して位置づけることが可能になる。それに対して，過去における未来の場合にはそれが不可能である。従って，関係節における事象は近過去，現在形，未来形であるなら独立しているという理解がなされるが，半過去であるなら独立していないという解釈も可能となる。

4．日本語とイタリア語の従属節における時制の解釈について

日本語の時制は英語やイタリア語のような言語のようにその基準時が固定的ではなく，可動的である。そのため，時制は基本的に事態との相対的な位置関係を表すものであり，事態の認知主体やその時間的位置についてはもともと文脈で補う仕組みになっているようである。一般に，日本語では「ル」または「マス」で終わる基本形と「タ」または「マシタ」で終わる形が時制機能を受け持っていると考えられているが，それに反する提案もある。Ogihara (1996) では日本語には時制がないと提案されている。従って，従属節における「ル」で終わる形はテンポラリティーを表すものではなく，「ル」形は‘morphologically tenseless’と述べられている。

‘In Japanese, what is assumed to be a present tense sentence is in fact morphologically tenseless. By contrast, languages like English have no such option. All sentences in the present tense bear an absolute present tense. Thus, these languages must use tensed sentences to convey tenseless interpretations’

Ogihara は日本語と英語における比較をしているが，その提案をイタリア語の例文に適用するとどのような説明ができるかを見てみよう。以前に挙げられた例文をもう一度挙げる。

(28) Gianni ha detto（言った） che Maria è malata（病気だ）
(28a) ジャンニはマリアが病気だと言った

イタリア語の従属節の「è malata」は現在形であり，この場合の時制形式の適用は日本語と同じである。イタリア語においては，従属節で描写された出来事・状態は話し手の発話においてもジャンニの発話においても事実でなければならないという時間的な解釈となる。つまり，マリアはその文が発話される時点でもジャンニの発話時にも病気でなければならないということである。それに対して，日本語ではマリアの病気の事実は発話時とは無関係であり，ジャンニの発話時のみと同時であるという解釈になってくる。日本語ではマリアの病気はジャンニの発話時とは同時であるが，発話時点とは同時でないということになる。こういった日本語の解釈はイタリア語においても可能であり，そのときは半過去を適用しなくてはならない。

⑵⑼　Gianni ha detto che Maria era malata　（近過去＋半過去）
（29a）　ジャンニはマリアが病気だと言った

例（28a）も例（29a）も日本語では非過去形となっており，イタリア語ではそれぞれ現在形と半過去となっている。これはイタリア語の動詞形式に時制の一致のルールがあるからであり，主節の過去時制は従属節の過去時制を牽引するからである。Ogihara の説明によると，(28a)と(29a）が同じ解釈となるのは日本語には時制の一致のルールがないため，そして従属節の非過去形は現在を表す形態素ではないためである。従って，日本語の立場から見ると日本語の現在形とイタリア語の半過去は同じ時間的な役割を果たしていると言ってよい。事実，半過去は「過去における現在」であるため，現在と同じ解釈を持つという提案はおかしくない。また，日本語では補足節と同じく，関係節における現在形も同時関係を表すと言える。

⑶⓪　太郎は泣いている男に会った

この場合，日本語においてもイタリア語においても「泣く」と「会う」は同時に位置づけられ，つまり「泣く」という事象は太郎の時間的な位置と同時である。

（30a）　Taro ha incontrato un uomo che piangeva　（近過去＋半過去）

ここまで説明したのは従属節におけるイタリア語の現在形と半過去と日本語の非過去形である。結論として言えるのは日本語で過去時制に埋め込まれた現在形を伴うのは DAR の現象ではなく，主節の時制との時間的な投錨のみであるということである。このため，イタリア語と日本語の従属節における現在時制の解釈は異なってくる。

次に，従属節に過去時制を適用するとどのような解釈の違いが出てくるかを見てみよう。

(31) ジャンニはマリアが病気だったと言った

以上の例文においては，間違いなく，「病気である」という状態は時間的に「言う」より前に行なわれた事象として解釈される。同じく，イタリア語においても過去によって以前関係が表されているおり，さらに引用動詞「言う」があることからこの時間的な順番は強制的なものとなる。

(31a) Gianni ha detto che Maria è stata malata （近過去＋近過去）

言うまでもなく，ある事象が主節以前であるならば発話時に関しても以前に位置づけられた事象として解釈しなくてはならない。つまり，「言う」「病気である」という時間的な順番は不可能である。過去時制に埋め込まれた過去時制は主節の時制にのみ合わせて位置づけられるため，今まで見てきた 2 通りの解釈はなくなる。そのため，2 通りの解釈は現在形のみの特性であるという説がある。Giorgi (2002) では，現在形のみの特性ではなく，従属節の時制が挿入された形態統語的な文脈の特性だと述べられている。2 通りの解釈が現れる言語とそうではない言語があるというのは各言語の現在形の本来の意味が異なっているからではなく，各言語の形態統語の文脈が異なっているからなのである。要するに，Giorgi はその 2 通りの解釈が可能であるかどうかは文法的な特性であると提案している。日本語にはイタリア語の半過去に完全に当てはまる形がないため，同じような特性を表す時制，つまり非過去形を用いて表現することになっていると言える。

まとめると，イタリア語と日本語の従属節の時制の解釈に関しては，イタリア語の過去時制には 3 つの形 (半過去，近過去，遠過去) があるのに対して日本語の過去時制は 1 つの形 (「タ」) のみである。従属節におけるそれぞれの特性と用法を分析した結果，イタリア語の半過去（現在形も）は日本語の過去時制ではなく，非過去（「ル」）に当てはまり，近過去と遠過去は日本語の過去形（「タ」）に当てはまると言うことができる。しかし，イタリア語の近過去も日本語の非過去形に当てはまるのではないかと考えられる場合がある。

4.1 近過去と非過去時制の関係について

これまで見てきたように，複文の場合，主節と従属節とで表されている 2 つ以上の事態が関わるため，複数の認知主体や時点を提案することができる。日本語はイタリア語に比べて過去時制形式が少ないため，あるイタリア語の文を訳した際，同じ形が何度か出てくることもある。その結果，解釈に関する様々な問題が出てくるということをここまで見てきた。さらに，時間副詞を適用すると様々な制限があり，発話時の基準時が異なってくる場合もあるということにも注目すべきである。また，イタリア語の過去時制は「not-real past」，つまり半過去と「real

past」，つまり近過去／遠過去を持っているのに対して日本語の過去時制は「real past」のみを持っていると言える。ここで「real past[9]」というのはその事態が終わったものとして捉えるということであるが，それに対して「not-real past」というのはその事態が終わったものとして捉えないということである。後者は形としては過去形であるが，視点の立場で考えると過去ではないと言える。すると，イタリア語の近過去も日本語の過去形も「real past」であるため，既に終わった事態を表し，一般に発話時以前に位置づけられると考えてもよい。しかし，必ずしもその通りであるとは限らず，その定義に従わない場合もある。まず，次の日本語の単文を見てみよう：

⑶2　＊明日私は終わった

以上の例文が奇妙に感じられるのは「終わる」という 1 つの過去における事象と未来における「明日」という副詞の組み合わせである。日本語を母語とする話者にとって例⑶2は完全に非文であり，文法的に矛盾している。この例をイタリア語にしてみよう。

(32a)　＊ Io ho finito domani　　(近過去)

イタリア語においてもこの例文は非文として解釈される。しかし，副詞の位置を変えてみると面白い結果が出てくる。

(32b)　Io domani ho finito

例（32b）は例（32a）と違い，非文ではない。副詞の位置を変えると（32a）における矛盾がなくなるのである。今まで見てきた例文は主節と従属節の時間的な相関関係に関するものであったが，この例は単文であるため，従属関係は存在せず，発話時と直接関係づけられ，発話時を基準時間とする時制のはずである。それにも関わらず，この例における近過去は未来のことを表している。では，例(32b)を日本語にしてみると，どのような文になるかを見てみよう。

(32c)　明日私は終わっている　　(非過去形)

例文からわかるように，副詞の位置を変えるだけでイタリア語の近過去は日本語の非過去形を表現していることになる。次の例文も見てみよう。

---

[9] Giorgi（2002）から引用。

㉝ Prima di sera siamo arrivati （近過去） ➡ その日の夜
（33a） 夜になる前に着いた ➡ ＊その日の夜

まず，日本語の訳を考えてみよう。もし「夜になる前」の夜は前日の夜を表しているなら例（33a）は非文ではないのは明らかであるが，その日の夜を表しているなら非文となる。イタリア語も同じく，前日の夜のことなら文法的には正しい例となるが，日本語と異なるのはその日の夜であるとしても正しい例として考えられるということである。

㉝ Prima di sera siamo arrivati （近過去） ➡ その日の夜
（33b） Siamo arrivati prima di sera ➡ 前日の夜

前日の夜なので「着く」が過去形になっているのは当然であるが，イタリア語においてはこれによって未来の事象を表すことも可能である。このような場合，例（32 c）で見たように，日本語では過去時制の適用が不可能であり，非過去形が適用される。

（33c） 夜になる前に着いている ➡ その日の夜

以上の例の考察結果に基づくとイタリア語の近過去と日本語の非過去形は同じ機能を持つ場合もあると言えるのではないかと推測できる。

しかし，イタリア語の過去時制の中には近過去のみではなく遠過去もある。通常，近過去で描写された事象を遠過去に替えることができると述べたが，そうでない場合もある。例えば，近過去で表現されている例（32a）と（32b）と㉝と（33b）は遠過去で表現することができるかどうかを見てみよう。

（32a） ＊ Io finii domani （遠過去）
（32b） ＊ Io domani finii （遠過去）

例文からわかるように，「domani（明日）」という副詞は遠過去と対立するため，近過去とは異なり，副詞の位置を替えても非文となる。例㉝も遠過去にしてみよう。

㉝ Prima di sera arrivammo （＊遠過去）
（33b） Arrivammo prima di sera （遠過去） ＞ （33a）と同じ解釈

この場合，文法的に正しいのは（33b）のみであり，意味を考えてみると日本語の（33a）と

同じ意味になる。従って，近過去を遠過去に換えることが不可能であるのが明らかとなる。遠過去と近過去の特性は異なることがわかり，この 2 つの時制が過去時制の中で同じ役割を果たしていないことも言える。今まで近過去も遠過去も「real-past」と呼ばれてきたが，今後は，これらを区別する必要があるかもしれない。イタリア語においては近過去と現在形の間に様々な共通点があり，近過去を現在形に替えることができる場合も多いため，一般に考えられているより意味的に近い時制であるということが提案できる。既に見たように，主節における近過去も現在と現在形に関係しているため，相互的に関係のある時制として考えるべきである。イタリア語の時制形式と対照することによって，こうした日本語の文法はその関係をさらに明らかにするのである。

おわりに

日本語と違い，イタリア語は時制の適用が強制的である。そのため，主節の時制に合わせて従属節の時制が決まっており，他の組み合わせは不可能である。しかし，全ての時制は常に時制の一致のルールに従わないことがわかった。

本稿[10] では主節における過去時制が 2 種類に分けられ，それらは現在と切り離されていない過去と現在と切り離されている過去である。それぞれは適切な時制の一致を適用し，後者の場合，主節との同時性を表すのは半過去のみである。それに対し，前者の場合，現在形の適用は可能である。この場合，主節における近過去は現在形と同じ働きをしているということとなる。この近過去の区別は文法的なルールに従うというよりは話し手の視点に従うものであり，話し手にとってその近過去で描写された出来事は現在まで持続するかどうかという区別である。次に，日本語では一般的にイタリア語の近過去も遠過去も「タ形」で表現されるが，それは正しくない傾向であるということもわかった。イタリア語の近過去を日本語にすると非過去形となる場合も多いため，イタリア語の近過去と日本語の非過去形は同じ機能を持つのではないかと本稿で考える。つまり，イタリア語の現在形だけではなく，半過去と近過去も日本語の非過去形に当てはまる時制だと考える。

（チェスパ　マリアンナ・言語文学専攻）

---

[10] 本稿は，2012 年 1 月に北海道大学大学院に提出した平成 23 年度修士論文「イタリア語と日本語の複文における時制について」の一部をまとめたものである。本稿の不備や誤りはすべて筆者の責任である。

Cespa Marianna，北海道大学大学院文学研究科，博士後期課程，mariannacespa＠hotmail.com

参考文献

・鬼山信行（2001）「従属節と時制の概念」―文学部紀要―文教大学文学部第 15-2 号
・加藤重広（2006）「日本語文法・入門ハンドブック」研究者
・工藤真由美（1995）「アスペクト・テンス体系とテクスト」―ひつじ書房
・坂本鉄男（1979）「現代イタリア文法」白水社
・高橋太郎（2003）「動詞の九章」ひつじ書房
・樋口万里子（1999）「日本語の時制表現と事態認知視点」―九州大学
・町田健（1989）「日本語の時制とアスペクト」アルク
・三原健（1992）「時制解釈と統語現象」―くろしお出版
・山本雅子（2001）「日本語時制形式の意味」―愛知大学　言語と文化 23 号

・Bertinetto P. M. (1986), Tempo, Aspetto e Azione nel verbo italiano: l'indicativo - Accademia della Crusca, Firenze
・Giorgi A. (2002), Per una teoria dell'interpretazione temporale delle frasi subordinate - Universitâ degli Studi di Venezia
・Giorgi A. (2009), A Grammar of Italian Sequence of Tense - University of Venice - Working Papers in Linguistics Vol. 19
・Giorgi A., Pianesi F. (2002), Sequence of Tense and Speaker's Point of View: Evidence from the Imperfect - University of Venice
・Mastrangelo M., Ozawa N., Saito M. (2006), Grammatica giapponese - Hoepli Milano
・Ogihara T. (1996), Double-Access Sentences Generalized - University of Washington
・Vanelli L., Salvi G. (2004), Nuova grammatica italiana - il Mulino, Bologna